

33 第51回 か国 リレー通信



バルバドス
Barbados



観光で生きる東カリブの島国 バルバドス

品田 光彦



写真1：島の西海岸からカリブ海をのぞむ（写真はすべて在バルバドス日本大使館提供）

は英語で、宗教的にはキリスト教英国国教会派が多数を占めます。したがってこの国は“ラテン”アメリカではなく、バハマ、ジャマイカ、ドミニカ国、アンティグア・バーブーダ、グレナダ、トリニダード・トバゴなどと共に、いわゆる英語圏カリブ（English Speaking Caribbean）に属しています。

英国統治時代、この島にはサトウキビ・プランテーションが数多く存在し、欧州への砂糖の一大供給地として知られていました。現在、人口の圧倒的多数を占めるアフリカ系の人々は、当時プランテーションの労働力としてアフリカから連れて来られた奴隷の子孫達です。独立後50有余年を経た現在のバルバドスは、英連邦（コモンウェルス）の一員で、議院内閣制、基本的人権の尊重、メディアの自由が根付いた民主主義国家となっており、アフリカ系の人々

バルバドス どんな国？

バルバドスはカリブ海の東端に位置する人口29万人ほどの島国で、面積は約430km²、日本の種子島くらいの小さな国です。

人口の9割以上がアフリカ系黒人、その他を欧州系、インド系、アラブ系などが占めています。カリブ諸国は、過去の植民地時代に何回も宗主国が変わったという歴史をもつ国が多いのですが、バルバドスは1627年に英国の植民地になってから1966年に独立するまで300年以上の間、一貫して英国の統治下にありました。首都ブ

リッジタウンは、中心部にある国会議事堂をはじめ、現在も英国風のたたずまいを残しており「リトルイングランド」などと呼ばれることもあります。こういった歴史を反映して、バルバドスの公用語



写真2：島内随所にあるショッピングセンター。生活に便利



写真3：バルバドス島の南海岸の風景

が中心となって国政を担っています。国土は便宜上 11 の地域に分けられていますが、国の規模が小さいので地方自治体はなく、完全な中央集権国家です。初等・中等学校の義務教育（5～16 歳）は公立校では無償となっており、識字率はほぼ 100%。1 人当たり国民所得は約 15,000 米ドル（2017 年世銀）で、すでに ODA 卒業国となっています。

外交活動の基軸はカリブ共同体（カリコム）の域内協力であり、近隣諸国とこれといった係争問題もなく、穏健かつ堅実な外交を展開しています。英語圏であり、このあと述べるように欧米観光客への依存度が高いので、バルバドスの目はラテンアメリカ諸国よりも、どちらかというと英国、米国、カナダといった国々に向けられている度合いが強いと言えるでしょう。

観光で生きる国

島の西側はカリブ海、東側は大西洋に面し、1 年を通じて温暖な気候に恵まれるこの国の経済は観光で支えられています。

日本からの観光客こそ年間数百人程度と少ないものの、空路、クルーズ船による英国ほか欧州諸国、米国、カナダなどからの来訪者数は毎年 100 万人を超え、観光を柱とするサービス産業が、この国の GDP の 8 割を占めています。



写真 4：かつてのサトウキビ・プランテーション領主の館。現在はラム酒工房になっており観光客にも開放されている

島内の随所、陽光輝く白砂のビーチ周辺には洒落たホテル、レストランが軒を連ね、欧米諸国では伝統的に「高級リゾート地」として知られています。（2000 年代初頭まではバルバドス・ロンドン間にコンコルドの直行便が就航していました。）国内唯一の国際空港である Grantley Adams 空港は欧米主要国のいくつかと直行便で結ばれており、東カリブ地域における空の旅においてハブの役割を果たしています。また、カリブ諸国の中には治安が問題である国も多いのですが、バルバドスの治安は比較的良く、外国人観光客が「普通の時間に普通の場所で」過ごしている分にはまず大丈夫と言っていいでしょう。

日本との関係

日本とバルバドスは 53 年前、すなわちバルバドス独立 1 年後の 1967 年に国交を樹立しましたが、私が勤務する在バルバドス日本国大使館が実館として開設されたのは今から 4 年前の 2016 年です（それまでは在トリニダード・トバゴ大使館がバルバドスを兼轄していました）。日本のほかに大使級の外交使節を置いているのは、英国、米国、カナダ、ブラジル、アルゼンチン、ベネズエラ、キューバ、中国、ニュージーランド、EU であり、こぢんまりとした外交団となっていますが、日本大使館は这其中で最も新参者、私はこの国に常駐する初代の日本大使ということになります。日本とバルバドスの二国間関係は伝統的に良好で、日本が実館を開いたことは官民ともに好意的に受け止められています。

この国の道路を走る自動車の約 8 割は日本車で、バルバドス人は

“日本”と聞くとまず自動車を思い浮かべるようです。柔道、空手など日本の武道や漫画、アニメといった日本の文化に対する国民の関心も驚くほど高いものがあります。JET プログラム（日本の学校における英語指導助手）や文科省国費留学生などへの応募も年々増加傾向にあります。日本大使館としては、バルバドスにおける日本への関心と正しい理解を増進するため、文化・スポーツ協力、人的交流の促進に力を入れています。加えて、来年開催予定の東京オリンピックを見据えて山形県南陽市がバルバドスのホストタウンに名乗りをあげ、すでに同市とバルバドスの間で交流が始まっていることも両国関係の幅を広げています。

先に述べたようにバルバドスは ODA 卒業国ですが、気候変動をはじめとする環境問題、ハリケーン対策など防災の分野における日本の協力拡大に向けての期待は大きいものがあります。2014 年の第 1 回目・カリコム首脳会合で安倍総理大臣は「カリコム諸国が抱える小島嶼国特有の脆弱性に鑑み、1 人当たりの所得水準とは異なる観点から支援することが重要である」と表明しました。日本は、この方針に沿ってバルバドスに対しても ODA による協力を一定程度続けています。JICA 研修生



写真 5：在バルバドス日本大使館

受入れなど技術協力のほか、2018年には防災分野で1億円規模の無償資金協力も実施しました。

今後の課題

さてここで、世界中で蔓延している新型コロナウイルス感染症について触れなければなりません。

バルバドス政府は、本年2月頃から諸外国における感染拡大状況を見てコロナ対策医療体制の整備を急ピッチで進めました。3月中旬に初めての国内感染者が確認されて以降は、すべての入国者に対する検疫措置や24時間外出禁止令などの対策を講じて爆発的感染拡大を押さえ込んできました。この原稿を書いている2020年6月上旬の時点では、国内の新型コロナ累計感染者数は約100名、累計死亡者数は10名弱となっています（累計治癒者数は約80名）。一見少ないようにも見えますが、人口29万人のこの国にとってはやはり心配な状況だと言えるでしょう。

コロナ禍が世界規模でいつ終息するかまだ判りませんが、バルバドスに関して中長期的に懸念されるのは観光の落ち込みと、その経済的影響です。実はこの国は近年、とくに2008年の世界同時不況以降、前政権（DLP（民主労働党）政権）の経済運営の不手際もあって、財政赤字拡大、債務累積、外貨準備不足という問題を抱えていました。要するに放漫財政だったわけです。このような中、対外債務返済が滞りはじめた2018年5月に行われた総選挙で、DLPのライバル政党であるBLP（バルバドス労働党）が大勝して政権交代が起き、BLPのミア・モトリー党首がこの国初の女性首相となりました。モトリー政権は、経済再

建を最重要課題として掲げ、痛みをともなう公的部門のリストラや税制改革など思い切った改革に着手し、本年に入りようやくトンネルの先に光が見えてきたところだったのです。

そこに起きたのが新型コロナウイルス（COVID-19）の世界的流行でした。

世界中の国々と同様に、バルバドスでも外国人観光客の足はまったく途絶え、ホテル、レストランなどはすべて休業に追い込まれて一気に大量の失業者が発生。今のところ大きな社会的混乱は発生していませんが、失業保険給付をはじめとする政府の財政負担は急増しました。この先コロナウイルス禍が終息しても観光客がすぐに戻って来るとは考えにくいので、観光が回復し経済が再び軌道に乗るには、少なくとも3～4年はかかるのではないのでしょうか。経済立て直しに向けてのこれまでの成果は振り出しに戻ってしまった感があります。

新型コロナウイルスによる困難

に直面しているのはどの国も同じではありますが、これといった製造業や天然資源もなく、観光で生きるバルバドスのような小国にとってコロナウィルスの影響は特に深刻と言えます。日本としても、こういった状況に鑑みて、対カリコム支援の枠組みの中でバルバドスへの支援を検討しているところです。一方、ものごとを前向きに考えるならば、バルバドスにとって、観光に過度に依存するモノカルチャー的経済構造を見直し、潜在性のある国内農業・漁業分野の振興など、発想を転換するための機会となるかもしれません。モトリー政権の今後の舵取りが注目されるところです。

（しなだ てるひこ 在バルバドス日本国大使）



写真6：バルバドスの国旗が翻る国会議事堂